

今宵も瘦せこけた、この私にコンクリートの床は安眠を与えてくれそうも無い。十一月の寒気は容赦なく襲いかかる天井の赤い豆ランプが涙の中にぼやけてしまった。

死の淵からの引揚げ

北海道 吉田久子

第一部 夫は銃殺、二人の子供に死なれ

北海道の占冠村は五十年前も前は陸の孤島と云われる程の寒村で汽車でさえ見た人の少ない時代でした。

私は体が弱く農業には堪えられず、父は大酒呑みで、若い者が疲れる筈がないと言われ農家に嫁ぐのは向かない、恋愛も、結婚もしないと心に決めておりました。父に怒鳴られればお仕舞です。

大東亜戦争が勃発した翌春昭和十七年春二十歳で満州で現地除隊した田村という同郷の人と結婚して渡満し、十八年長女、十九年長男と年子に恵まれました。

主人は弱い私を心から大事にして下さり、結婚の幸せにひたつておりましたが戦争はだん々々激しくなりラジオニュースでは敵の損害甚大なり、我が方の損害軽微なり、を信じながらも主人にいつ召集が来るのかと不安の毎日でした。

昭和二十年七月二十日予想していた召集が来ました。私は貴方だけを頼って満州迄来たんですから手紙だけは下さいと何度も念を押して送り出した、夫からの手紙は待てども々々も来ません。私は毎日書いても夫の住所が判らず溜ってゆきます。

召集されてから十一日目に住所のない夫の手紙が配達され、秘密部隊に入ったこの手紙もやっと外出する兵隊に頼んで出したという、私は声を上げて泣き崩れました。：がこうしてはいられない子供をすっかり育てなくてはと自分に命じました。

やがてソ連が参戦し満州に攻めて来ました。牡丹江や玉泉にいた日本人はハルピンに避難することになり荷物は持って行けないので衣類など売り八月十三日に駅に行きましたが無蓋車です。雨が降って来て沿線に

は避難して来た人々死んだ老人、子供が何十人と捨て、あります。汽車は乗る余地もなく僅かな荷物も捨て、子供は窓から入れて貰いハルピンに着きました。八月十五日重大放送で敗戦を知りそれからが大変です。毎日兵隊が物取りに来ます。女子供は裏の島に一塊になって震えています。男は三階のボイラーの中に隠れる、土足で家の中は滅茶々に荒らされ一日に何度も来るのです。

八月十八日夫が部隊解散となり探して来て再会し、よく子供も元気で避難してくれたと涙で喜び合いました。

途中の開拓団では満人の襲撃で殺されたり自殺したりして血の海であったと夫は言う。九月六日夕方大勢の兵隊が来て、夕食にウドンを茹でいるところでしたが、今すぐ此所を出て行けと言う。仕方なく汁もないウドンを紙に包み、急激に寒くなる満州ですので着替えるリュックサックを纏めると子供を背負った上から押さえてきます。わざと急がせて荷物を置いて行かせる心算なのです。全く惨めなことです、一人々々

身体検査でお金も取られました。

その後元使っていた満人に会い、田村さんは今朝工場でソ連兵に撃たれて死んだと言う。

私はすぐそこへ連れて行ってと頼み、年子を背負って抱いてついて行きました。

主人は一発で心臓を射抜かれて倒れていました。何ということでしょう。

涙もできません。人間涙のである時甘えのある時だと知りました。ベルトに縫い込んだお金だけでもと思いましたがそれも取られてありません。

玉泉で着物を売ったお金を持って来たことを満人の劉は知っていて、密告して殺し、お金を取ったのです。頼り切っていた夫に死なれ私は只茫然自失、どうして青酸カリを手に入れておかなかったのかと悔やみました。私も子供も一緒に死ねたらどんなに幸福だろうと思いましたが形見の子供二人がいる、強く生きなければならぬ。

九月十三日には新香坊へ移されました。私は泣いてはおられません。涙も涸れ果て二人の子供を連れ鎌や

歟を持ち大豆刈り、いも掘りなどをさせられたが「働かざるは食うべからず」はソ連の鉄則です。

晝は皮のまま、茹たイモ卵大のもの一ツ、子供の分を下さいと言っても駄目、金さえあれば満人が何でも売りに来るのです。一ツのイモを分けて食べるしかありません。

収容所では白くしない高粱に野菜、腐敗したトウモロコシの粉を混ぜて食べ、栄養失調やお腹をこわし下痢、薬はなし、そこへハシカが蔓延し名ばかりの病院へ隔離、夢中で看護こんなことで子供を死なせてたまるかと必死になって看病したが主人の死んだ一か月目の十月六日一郎はどうく死んでしまいました。

「お母さんホコチャン、白いご飯少しでも食べたいヨ……」この美穂子だけは助けなければ。同じ病室の主人が手に入れて来て奥さんに食べさせている、一口でも子供に下さい、と口に出しか、っているが、どうしても言えず、ホコチャンもとうく十月八日の明け方静かに目を閉じてしまいました。六、七、八日と命日が続きます。死んだ主人が二人の子供を連れていった

のです。

私はこの子等が死んだらと覚悟を決め、北海道の親達に書き置きを持っていました。

凍結されておろすことのできない貯金通帳や残っている衣類を焼いて、細紐を持ち遠くに見える立ち木まで歩き、今までの苦勞も消え、夫や子供のそばに行けると思うと嬉しく楽な気持ちになりました。

若し失敗したらと病院でホルマリン毒薬と赤い字で書いたピンを持って来ました。これを呑んで首を吊ったら必ず死ねると、足を踏み外したが低くて何度も繰返したがため、「あなた早く迎えに来て」、と泣き呼ぶ、死神にまで見放されてしまったのか、疲れ果てて倒れてしまった。回りは真つ暗、満人が二、三人通り、アイヤ日本人の女、と気持ちが悪かったのか通り過ぎて行った。藪の中や草原を越え、元の病院までたどり着く頃、火の玉が七ツ・ポーポーと尾を引いた。あ、又七人死んだのだ。

数日後、子供達の死んだ部屋で寝ていた時、お腹に元氣な胎動を感じ驚きました。五か月だったのです。

夫の忘れ形見、どんな苦勞をしても産んで育てよう
と決心。この收容所に居たら、又子供を死なせてしま
う、何としてもハルピンに戻つて働いてお産の準備を
しなければ無一物、着のみ着のままの私です。

第二部 ハルピンから乳呑子を抱えて

部隊が解散して帰還した夫は満人に連れ出され密告
されて銃殺、一歳と一歳四か月の二人の子供には死な
れ、ホルマリンを呑み、首吊りをしてみたが失敗し、
夫の形見五か月のお腹の子をどんな苦勞をしても育て
ようと決心しました。

ところは終戦の混乱の続く満州、ハルピンでのこと、
お金もとられ、寒くなつても防寒具もない着のみ着の
まま五か月の身重で人の家に世話になり、生きるため
高粱を食べるだけの生活苦が引揚げるまで延々と続く
のです。

ここ新香坊の收容所にいたら又子供を死なせてしま
う、何とかしてハルピンに出て働いてお産のお金を準
備しようと思ひに決めました。

其の頃、「貴方に逢いたがつていている人がハルピンに
いる」ということを聞きました、藁にも縋る思いで早
速ハルピンに出て中西さんを尋ねました。

主人の友人の兄さんで、主人も友人に妹をあげる約
束迄した方の兄上で、戦時中一度逢つたきりの方です
が、中西君は立派な兄さんを持つて幸せだと言つてお
りました。

戦後の日本人男性は家族を養う仕事もない時、中西
さんは日本人の家族を三組も同居させて養つておりま
した。

堂々たる体格で、ロシア語も満語も堪能で、プロ
カーをしているということです。背広姿で街を闊歩し
ているのです。

良く来てくれました。私は貴女を随分捜しました、
私はこの年で（三十二、三歳）独身です。田村さんの
子供なら是非欲しい、どうか私と結婚して下さい、と
言います。私の事情を良く承知の上です。

中西さんは北海道十勝の音更の方です。私は考えま
した。

何とかこの子だけは無事に産んで日本に帰りたい、
気持だけは立派ですが、ハルピンには出たものの、お
金も無く住む家もない状態です、天の助けとはこのこ
とかも知れません。

けれども主人は提灯に釣鐘の例えの通り、私のよう
な不似合いの者を大事にしてくれました、心を鬼にし
ても裏切ることはありません。

又、婚家と実家は同じ北海道の占冠です、それを考
えた時、「誠に勿体無い程有難いお話ですが、私はと
ても結婚は考えられません、今は只何とかこの子を産
んで故郷へ連れて帰ることしか考えられません、本当
に申し訳有りません」と謝りました。

中西さんは深く理解して下さいました、その上、私
が帰る時お金を包んで下さいました、私は恥を忍んで、
伏し拝んで頂戴致しました、啖呵を切ったところで、
お金無しで暮す術もない私でした。

日本人は皆生活苦に喘いでいるので満人の家へ住み
込みで女中をしました、御夫婦に女兒二人の四人暮し
で、弁護士の家でした。

一部始終、生活様式が違います、夜は一人ずつ便器
で用を足します、便所は外にしかありません。

風呂は無く、お尻だけは一日置きぐらいに洗面器の
ような物で洗います、居間は一間しか無いので人前で
洗うのです、私はとても人前で洗えないので洗わない
していると、日本人は不潔だと言います。

洗濯は下着も半月以上は取り替えません、洗濯をす
る時は寝棺の様な大きなタライで山のように手で洗う
のです。石けんの泡は出ないし、こびり付いた垢は落
ちないし、一日掛りです、顔の洗い方、野菜の洗い方、
全部違います。

奥さんはヒステリックに怒ってばかりいます、中国
の男性は優しいので、旦那様は早く起きて私のおまる
迄捨ててあるのには驚きました、兎に角朝三時頃から
起きて勉強をしているのです、私は捨てて貰うのが嫌
で、用を足したら夜中に捨てて来ました、皆同じ部屋
に寝るのです。

其の内に旦那様の甥で県公所（市役所）に勤めてい
た方が日本人の指導下にいたことで、危険で北方から

逃げて来たのです。其の方は日本の大学を出たとかで、日本語が上手でした、私も暫く日本語を話す機会も無く啞のような状態でした。

そんな折、話し合える方が来て、とても嬉しくて色々話しました、言葉が通じないので、満人夫婦は疑っていたかもしれません。

或夜、やはり男です、其の方は私の所へ入って来ようとなりました、私は布団をがっちり纏んで抵抗しました、それを見られて、甥は翌日追い出されました、「私が居なくなったら貴方はいじめられるから可哀想だ」と言ってくれました。

其の内にお腹は大きくなります、奥さんは腹が大きいのを騙したと怒ります、来客のたびに日本人の悪口を言います、日本の男子のことは糞味噌です。

満語は良く分からなくても悪口は良く分かります、外地で日本人の悪口を言われるのは身内を悪く言われているのと同じで、とても悔しいのです。

そんな時、偶然沖崎さんに逢いました、お互いに身内に逢ったように喜び合いました。

「奥さんが田村さんや子供さんを亡くされたのを聞いて、山本さん（玉泉にいる時、仲良くしていたお医者さん）も心配して一生懸命捜しているのだよ、そんな所やめて来なさい。」と言われてやめました。

一晚、沖崎様に泊めて頂き翌日、山本さん宅へ連れて行ってくれました。

「良く来て呉れた、随分捜したんだよ、これからは安心して家にいなさい」と言つて下さいました、こんなに嬉しい安らぎの言葉が外にあるでしょうか。

山本さんには、私と同じ頃年子に生れたお子さんがおり元気に育っております。

驚いたことに六畳一間に山本さん親子四人の外に玉泉にいた近藤さんという子供一人の若夫婦も居候していました。

奥様は勿論とても良い方でしたが、朝鮮人である旦那様には敬服致しました。

私は甘えてはおられませんので、せめておかず代だけでも足しにして貰い度いと思ひ、酷寒のハルピンの街でお餅や飽子等を仕入れて来て立売りしました。

身重な身体でも手も足も凍る程の酷寒です、用を足し度くても釘を外すことも手が凍えて出来ないのです、走って帰って奥さんに外して貰って用を足しました。

街で立売りをしていると、満人の子供が「日本人の馬鹿野郎」と馬鹿にして屋根からだんどん物を投げけるのです、悔しいけれど、負けたのだから仕方ないと思いました。

この様な惨めな思いをしながら、翌年の三月十二日無事に男の子を出産、乳呑児を抱えて佐世保に引揚げて来ました。

敗戦、苦難の日々

北海道 神田雅夫

昭和二十年八月九日ソ連軍は突然空爆して来た。

当時在満日本人男子は殆ど招集され、私もソ連の空襲の時は、奉天郊外の砂漠地帯で幕舎野営中であつた。

毎日の訓練は、急造爆雷を抱いて重戦車に飛び込む陸の特攻隊であつた。八月十四日午後非常呼集で、明十五日は重大放送がある謹んで聴けとの隊長の通達あり、いよ／＼決戦か、爆雷を抱いて散り果てるか、死の恐怖や、家族の安否や、生身の人間としての感情など一切考え及ぼす無私の心境とはこのことか。日本男子として国に報いる。只それのみであつた。

八月十五日未明非常呼集のラッパは鳴り渡つた。幕舎前の広場前に整列、出て来た隊長の足取りは、常の威風堂々たる英姿とは打って変つた、屠所に引かれる羊の風情である。

日本は敗戦した。只今終戦の詔勅があつた。居並ぶ兵も一斉に地に伏して号泣。

幕舎に帰り別命を待つ。お互いに見合す顔々々クシヤ／＼の顔、あれが日本男子の顔を流れる血涙か、武器弾薬、私物、食糧を残し外のもの一切焼却との命令、作業終了まで二日間を要した。

上部の命令も届かなくなつて、これからの行動は中隊単位となり、先づは奉天を指すことになつた。こ